

JSEKM The Japan Society for Electronic Keyboard Music

日本電子キーボード音楽学会

第 16 回全国大会

＝オンライン開催＝

抄録集

主 催：日本電子キーボード音楽学会

と き：2021 年 9 月 12 日（日）

ところ：オンライン開催

目 次

◎ <u>基調講演</u> (13:00-14:00)	4
田中 智晃 (東京経済大学経営学部准教授)	
「イノベーションとマーケティングから考える電子楽器市場の歴史」	
～ヤマハのエレクトーンを中心として～	
【電子オルガン部会】 (14:15-17:30)	
◎ <u>ラウンドテーブル</u> (14:15-16:15)	6
「電子オルガンのこれから ―キャリアと教育現場の活用―」	
話題提供者：高橋和哉氏 (メットライフ・ドーム・オルガニスト) 他	
◎ <u>研究発表</u> (16:30-17:30)	
1 五十嵐 優 (平成音楽大学)	7
「電子オルガンリズムプログラムの発展的活用方法	
―スタイルファイルフォーマット(SFF)の活用について―」	
2 松本 玲子 (共愛学園前橋国際大学短期大学部)	8
「ミュージアムジーク―電子オルガンによるミュージアム・コンサートの実践―」	
3 阿方 俊 (平成音楽大学)	9
「SEO (シンガポールエレクトーンオーケストラ)	
―ピアノ科学生のコンダクターレス、暗譜演奏によるベートーベン交響曲―」	
【電子ピアノ・ICT 部会】 (14:15-17:30)	
◎ <u>ラウンドテーブル</u> (14:15-16:15)	10
「デジタル時代の音楽教室をソウゾウする―“ツナガル”をキーワードに」	
話題提供者：	
1 井上 洋一 (愛媛大学教育学部)	
「音楽科における GIGA スクール構想」	
2 相原 健二氏 (SOUND GARDEN inc.)	
「音楽の多様化による地方発信型ミュージックスクールの可能性」	
3 平松 江梨 (Tutteo Ltd.)	
「Flat for Education を用いた一人一台端末環境での音楽教育」	
◎ <u>研究発表</u> (16:30-17:30)	
1 小林 恭子 (目白大学人間学部)	12
「コロナ禍におけるリモート合唱の実践報告」	
2 井上 洋一・平井 智香 (愛媛大学教職大学院)	13
「ICT を活用した体験型音楽鑑賞」	

【タテ線・ユリディス部会】（14:15ー17:30）

◎ラウンドテーブル（14:15-16:15）-----14

「タテ線譜・ユリディスの今後の方向性-I タテ線譜・ユリディスとは何かシリーズ
のまとめと今後」

話題提供

1 阿方 俊

「3月27日オンライン発表の海外での反応と今後」

2 石井 良弥（センチュリーハウス武蔵浦和 支配人/プロジェクト窓口）

篠塚 早苗（センチュリーハウス武蔵浦和 看護師/指導アシスタント）

「いきいき百歳ピアノ」プロジェクト-IとIIの位置づけ

3 坂井 康二

「厚木市「すみれ会」月例会におけるユリディスの活用」

4 斎藤 康之

「Eurydice のこれまでと、今後の展開について」

◎研究発表（16:30-17:30）-----16

1 橘川 琢

「キーボードと音楽療法の現場での一場面，QOLについて」

イノベーションとマーケティングから考える電子楽器市場の歴史 ～ヤマハのエレクトーンを中心として～

田中智晃

2021年6月に名古屋大学出版会から『ピアノの日本史：楽器産業と消費者の形成』を出版した。この本では富裕層の専有物であったピアノが人々に親しまれるようになった由来を、明治～現代の歴史からたどり、その普及を可能にした意外な原動力を明らかにした。楽器産業における斜陽産業化の危機を乗り越えるメカニズムを解明し、音楽教室とともに世界へと広がった日本の鍵盤楽器産業の全体像を描いている。

ピアノ（アコースティック・ピアノ）は、他の楽器と比較して平均単価が高く、本体のサイズが大きいことから設置場所の問題があり、使用方法を長期間に渡って習う必要がある販売制約の多い商品である。そのためメーカーは大量販売を前提にすると、売れるための仕組み（マーケティングや流通戦略）が必要になった。これについては大量生産体制の確立との関連から、本書で詳しく述べているが、さらにピアノを始めとする楽器には斜陽産業化の懸念が常にあり、この点の対応も重要である。例えばピアノの普及率は歴史的に25%くらいが上限といわれ、テレビや冷蔵庫、車など他の耐久消費財と比較すると、非常に低い数字となっている。

さらにピアノは、根本的な技術進歩は1900年前後に終了しており、新製品による買い替え需要が期待できず、メンテナンスがしっかりなされていれば、数十年にわたり使用可能な高耐久消費財なため、故障による買い替え需要も喚起しにくい製品である。そのため、一度ピアノが市場に行き渡ると、広範な中古市場が形成されて、新品が売れない状況が訪れることになる。このようなピアノ斜陽産業論をヤマハでは戦後間もないころから把握しており、販売台数が右肩上がりの高度経済成長期においても、いずれ斜陽産業化する懸念を抱いていた。そこで、ヤマハは内部コンポーネントに進化の余地があり、買い替え需要が期待できる電子オルガン（エレクトーン）を1959年に発売し、鍵盤楽器市場そのものを拡大するための手頃な音楽教室を全国に開設し、海外市場へも参入する国際な戦略を積極的に実行してきた。

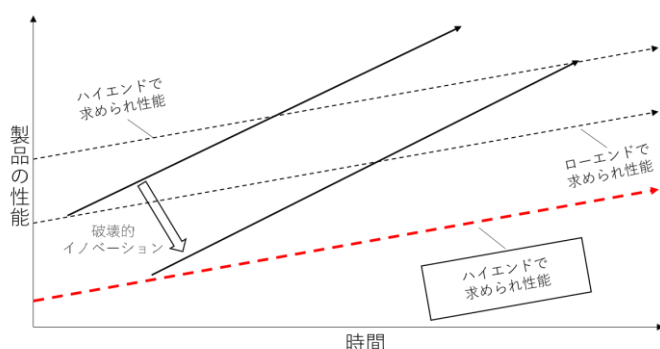


1959年に発売された ELECTONE D-1（ヤマハ エレクトーンシティ渋谷にて筆者撮影）。

周到に練られたヤマハの戦略は日本市場だけでなく、世界において大きな成果を上げ、1960・70年代に他社の追随を凌ぐ競争優位性をヤマハにもたらした。ただ1980年代になるとピアノは成熟市場になり、5～10万円程度の安価な電子楽器が登場した。それが、1981年1月に発売されたカシオトーン（Casiotone）であり、電子キーボードという新しいジャンルを開拓した製品である。当初ヤマハはカシ

オトーンを大人向けの玩具とみなしていた。というのもカシオトーンは鍵盤数が 49～50 鍵の一段鍵盤の楽器であり、エレクトーンと比較するとはるかに低スペックの電子楽器だったからである。しかし、カシオトーンがヤマハ音楽教室に通う生徒の間で人気商品になると、ヤマハはカシオトーンをエレクトーンの安価な代替材として認めざるを得なくなった。ここに経済学の世界で言われる破壊的イノベーションが成立することになった。

イノベーションの古典的な理論によると、既存企業（大企業）は破壊的なイノベーションを起こすことが困難であるといわれている。しかし、ヤマハは素早く対抗機種としてポータサウンド (PortaSound) という 1 段鍵盤 (32～44 鍵) のキーボードを 23,500～36,000 円で 1980 年 12 月に発売した。これは他産業の歴史から考えると珍しい例ではあるが、ヤマハは市場がいずれ斜陽化するストレスを常に感じる中で、下位市場へ防衛的に移行したと考えられる。また、楽器特有の性質であるが、ローエンドで求められる性能の下にハイエンドの性能がもう一つ存在し、他の電子機器とは異なる技術環境が楽器産業にはあったと考えられる。



(出典) Tomoaki Tanaka, 2021, p. 163, Figure 9.

ここにエレクトーンの衰退が決定的となり、現在日本におけるエレクトーンを含む電子オルガンの市場規模は楽器全般の約 2～2.5%にしか過ぎない。エレクトーンには未来はないのだろうか？楽器産業をイノベーションの観点から考察すると、複数のイノベーションが混在・同時共存できる可能性がある。また、楽器のような人の感性に訴えかける商品は、単純な性能の優劣によって生存が決まらず、最新技術が搭載されていないエレクトーンにも生存のチャンスはあるだろう。これからは、メーカーのプロモーションよりも、ユーザー（特にプロの演奏家）の行動が電子オルガン市場の今後を決定すると予想される。

ー講演者略歴ー

田中智晃（たなか ともあき） 東京経済大学 准教授

東京大学大学院経済学研究科にて、ピアノをはじめとする楽器産業の歴史や流通、マーケティングを研究。博士課程を単位取得退学後、東京大学特任研究員を経て、2011 年に東京経済大学経営学部専任講師に着任。現在、同大学准教授。東京大学非常勤講師。2018 年に東京大学より博士号（経済学）を取得。これまで楽器小売店の伊藤楽器（千葉県）、三木楽器（大阪府）、電子楽器メーカーのコルグ（東京都）の社史を執筆し、その過程で得た内部資料を基に論文を執筆してきた。2020 年には一般社団法人全国楽器協会の依頼を受け、日本の楽器市場規模に関する大規模な統計調査を行った。趣味でヤマハのシンセサイザー（DX-7、EOS）を愛用。学生時代はヤマハ音楽教室でフルートを習っていた。

電子オルガンのこれから —キャリアと教育現場の活用—

司会：赤塚博美（洗足学園音楽大学）

岩井孝信（聖徳大学）

書記：五十嵐 優（平成音楽大学）

本年は電子オルガンが誕生し 86 年、国産電子オルガンの販売が始まって 63 年を迎える。

これまで本学会の電子オルガン部会では、飛躍的な進歩を遂げてきた電子オルガンについて、「電子オルガンと他の楽器（アコースティック楽器）の共生」や「電子オルガンにおける音楽表現の変遷と本質」、「電子オルガンの様々な演奏環境や演奏会場における工夫や配慮」などをテーマに取り上げディスカッションしてきた。

また、聖徳大学にて開催された第15回全国大会では、電子楽器誕生百周年を迎えるにあたり基調講演で長年にわたり電子楽器の開発・設計に携わってこられている三枝文夫氏（現コルグ株式会社監査役）に「電子楽器の100年 一先駆者たちの夢」と題した興味深い講演を、また今春Web開催の研究会では北口二郎氏（国立科学技術博物館研究員）の「電子楽器の技術発展の系統化調査」という基調講演を聴講する機会を得た。さらに、今回Web開催第16回全国大会では、田中智晃氏（東京経済大学）の「イノベーションとマーケティングから考える電子楽器市場の歴史 ～ヤマハのエレクトーンを中心として～」と題した基調講演も企画されている。

これらを踏まえ「電子オルガンのこれから —キャリアと教育現場の活用—」というテーマを取り上げ、会員の皆様と意見交換したいと企画した。

今回の話題提供者として埼玉西武ライオンズ・メットライフドーム球場オルガニストとして活躍中の高橋和哉氏に以下の内容を伺いたい。

第Ⅰ章 野球場におけるオルガン演奏の始まり

第 1 節 アメリカ合衆国のメジャーリーグにおけるオルガン演奏の歴史

第 2 節 日本のプロ野球におけるオルガン演奏の歴史

第Ⅱ章 私自身の野球場での主な活動内容

第 1 節 使用楽器、機材について

第 2 節 演奏当日までの準備

第 3 節 演奏日当日 1 日のスケジュール

第 4 節 日々、心掛けている点

第Ⅲ章 野球以外のスポーツにおける電子オルガンの汎用性

第 1 節 過去の実施例

第 2 節 今後の可能性と提案

また、今回の研究発表演者である松本玲子氏（共愛学園前橋国際短期大学）のミュージアムコンサートなどユニークな電子オルガンの活用法についても話題提供を頂く予定である。

さらに学会会員の山中秀樹氏（元小学校教諭、国際協力機構）や安井正規氏（電子オルガン奏者）からも教育現場での活用についても話題提供を頂く予定である。

電子オルガンリズムプログラムの発展的活用方法 —スタイルファイルフォーマット(SFF)の活用について—

五十嵐 優（平成音楽大学）

STAGEA に搭載されている SFF の機能について深掘りし、STAGEA での演奏表現の可能性について考える

本研究発表は、電子キーボード音楽研究 vol. 14 で発表した研究論文の内容に基づいた内容である。

ヤマハエレクトーン STAGEA が発売されて 2020 年で 16 年となる。EL-900m 等の EL シリーズから ELS-01C、ELS-02C へと機能や音色が飛躍的に進化する中、STAGEA シリーズからスタイルファイルフォーマット（SFF）に対応していることに着目し、電子オルガンでの表現の幅や可能性を追求するため、ELS-02C での SFF の発展的な活用方法を研究した。

取扱説明書や解説書では取り上げられる機会が少ない SFF を活用することにより電子オルガンが持つ機能をフル活用し、主に独奏の際の表現の幅を広げる一助となることを目的とする。

具体的には、オリジナルのアカンパニメントパターンやオートベースパターンの作成、デフォルト以外の拍子の設定、32 小節を超える小節数の設定、アドドラムにドラム以外の音色の設定・入力である。これらの技術を応用することにより、既存の方法では演奏不可能であったパートの再現、現代音楽等の複雑な変拍子を含む楽曲の演奏、実際のドラム演奏者の演奏をリアルタイム録音したものを MIDI データ化し、リズムシーケンスとして演奏に取り入れることが可能となる。

- ① SFF ファイルについて
- ② SFF ファイルの構造について
- ③ SFF ファイルを使用して出来ること
- ④ 活用例
 - ・変拍子の設定
 - ・アドドラムにドラムキット以外の楽器を設定
 - ・実際のドラム演奏者の演奏の取り込み

ミュージアムジーク —電子オルガンによるミュージアム・コンサートの実践—

松本 玲子

「ミュージアムジーク」とは発表者がミュージアム・コンサートをおこなう際に構想した概念で、“museum”（博物館）と“muziik”（音楽）の二つの言葉から作られた発表者による造語である。ミュージアムジークは楽曲そのものを鑑賞するのではなく、展示や博物館の歴史や背景、作家や関わった人々、世相や取り巻く環境を含む「記憶の地層と時空を超える空間」を音楽によって立ち上がらせ、来場者につなぐことを目的としている。博物館における新しいコンサートの考え方であることを示すために、商標登録された¹⁾。

本発表ではまずミュージアムジークの事例として、2017 年の西宮市貝類館での実践を紹介する。コンサート来場者と博物館をつなげようとした同実践では、館の象徴となっているヨットが展示されている中庭で電子オルガンのコンサートをおこない、さらに新たな気付きや体験を来場者にしてもらうため、館外周辺地域に出て電子キーボードを演奏した。

次にこれらの実践について、サウンドスケープの理論を使いミュージアムジークの考え方を示す。過去が個別に陳列されている博物館内で、コンサートによって「特別な出来事」がイマ・ココで起きれば、それは来場者にとって特別な時間になる。ミュージアム・コンサートは、博物館内に祝祭的な意味を持つ場として機能するのではないだろうか。

＜発表者によるミュージアムジーク実践例＞

実践年	ミュージアム・コンサート(博物館・タイトル)
1988	竹久夢二伊香保記念館「詩と音楽でつづる夢二の世界」
1993	ガラスの博物館「ミュージアム・コンサート」
1996	高崎市美術館「ミュージアム・コンサート」
2000	大阪府立弥生文化博物館 特別展「卑弥呼の音楽会」関連コンサート 「タイムカプセル～卑弥呼からのメッセージ～」
2001	世界のタイル博物館「ミュージアム・コンサート」
2001	岡山市立オリエント美術館ミュージアム・コンサート 「ミュージック・ミュージアム」
2001	京都国立近代美術館「シエナ美術展」関連事業 「エレクトーン タイムカプセル・コンサート～音楽で旅するイタリア～」
2002	山口県立美術館「シエナ美術展」関連事業 「エレクトーン タイムカプセル・コンサート～音楽で旅するイタリア～」
2002	群馬県立近代美術館「博物館の日」制定記念タイムカプセルコンサート 「アンジェ美術館への旅」
2002	奈良県万葉文化館開館一周年記念イベント 「古代文化の東と西」コンサート
2002	大阪府立近つ飛鳥博物館 企画展「西域への道～シルクロードと大谷探検隊～」関連コンサート 「音の道 音の旅 シルクロード」
2003	大塚国際美術館 開館5周年記念「ミュージアム・コンサート」
2003	浜松市美術館 特別展「平山郁夫展」関連事業「シルクロード 音楽の旅」
2004	伊豆一碧湖美術館 開館10周年記念コンサート 「音楽で巡るバリ～花の旅～」
2007	群馬県立自然史博物館 企画展記念コンサート 「アイスイージ～地球と動物たちのハーモニー～」
2015	金谷美術館 スウェーデン芸術祭 「ミュージアムジーク～スウェーデン芸術祭“オーロラ”を聴く～」
2017	西宮市貝類館リニューアルオープン事業 「ミュージアムジーク 貝たちとめぐる海の旅」

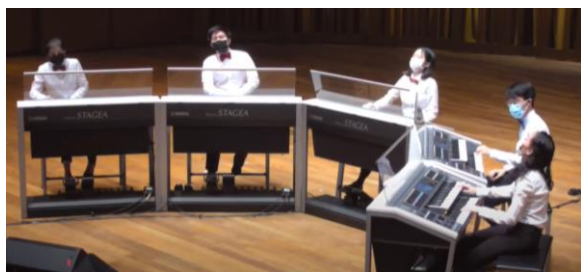
1) 登録番号第 4815325 号、登録日 2004 年 11 月 5 日、公開日 2004 年 4 月 22 日

音大ピアノ科学生エレクトーンオーケストラによる

「ベートーベン交響曲第二番」暗譜演奏の意味するもの

阿方 俊（平成音楽大学・APEKA）

シンガポール大学 YST 音楽院は、3 月 27 日、同音楽院ホールでピアノ科学生 5 名による「ベートーベン交響曲第二番」の全曲演奏を行い、オンラインでライブ発信をした。<https://Singapore Electone Orchestra 2021-03-27> で検索可。



このようにピアノ科の学生が、エレクトーンで交響曲を全曲演奏したことは前代未聞のことであり、「音楽の歴史は、楽器の歴史である」という観点からすると音楽史にその名が刻まれる価値のあるものであろう。



発表者は、このエレクトーンオーケストラ設立コンサート（2016 年 10 月）を聴いたのが縁となり、同音楽院ピアノ科主任トーマス・ヘクト教授（Thomas Hecht, 写真左）と情報交換を続けるようになった。その活動は、JSEKM「電子キーボード音楽研究」の海外情報などでヤングピアニストによるエレクトーン演奏という内容でレポートしてきた。

ここで注目すべき点として次のものがある。

- ① エレクトーンオーケストラ結成のきっかけ
ヘクト教授が、台湾・東海大学電子オルガン楽団とピアノ協奏曲を郭宗愷教授の指揮で協演し、この演奏スタイルが未来指向のピアノ教育に必

須であることを強く感じ、それに答えてシンガポール YST 音楽院に 8 台の最新ステージが備品化されたこと。

② コンサートに至る特異なプロセス

このコンサートに向けたアンサンブル講座は半期、1 回 2 時間、13 回であり、通常のレッスンではステージコンサートまで結びつかない。これを可能にしたのは関係者全員が納得する自主性を重んじる能動的レッスンにあったことが挙げられる。

産学協同の一つとしてヤマハ・ミュージック・アジアの NG T. WENG さん（写真右下）がレジストレーション（音色設定）で最初のレッスンに参加する。また写真右上の VIONA NATALIE さんはエレクトーンコンクールアジア大会のグランプリ受賞者であることもこのプロジェクトの特色のひとつである。

 TAY S. WEN Fl. Ob.	 ANDREN KOH Cl. Bn.	 VIONA NATALIE Hr. Tp. Timp
 KENGNIS AN 1st 2nd Vl.	 JONAH KWEK Vla. VC. DB.	 NG T. WENG Registration

③ 未来指向のピアノ教育に応える学生の感想

学生から送られてきた感想は、オーケストラ楽器の持続音を体験できた喜びとアンサンブルのすばらしさに満ちている。ピアノと電子オルガンの共生による新分野の可能性を感じていただけたら幸いである。

デジタル時代の音楽教室をソウゾウする ー “ツナガル” をキーワードにー

電子ピアノ・ICT部会

コロナ禍によって、音楽の学びの形は急激に変化しました。歌う、奏でる、合わせる、といったあたりまえの活動が制限され、十分な準備をする間もなく、全国の小・中・高等学校、大学で個別学習やオンライン授業の実施が迫られました。このため、文部科学省による「GIGAスクール構想」を推進するためのICT環境整備は、3年の計画が1年に短縮され、多くの学校で1人1台端末の環境が整いつつあります。

しかし、ICT活用や「GIGAスクール構想」の本来のねらいは、眼下のコロナ禍に対応するためのものではなく、情報活用能力を育成し「GIGA (Global and Innovation Gateway for All) 全ての児童・生徒のための世界につながる革新的な扉」を開くことにありました。

こういった背景から、本部会のラウンドテーブルでは、学校教育、生涯教育の各現場から、連携・協働・発信など“ツナガル”をキーワードとした話題をもとにして、本来、音楽が目指した新しい学びの形をソウゾウ（想像・創造）したいと思います。

本日も参加される皆様には、活発にコメントをいただき、この部会から全員参加の“ツナガル”ラウンドテーブルになることを期待しています。

話 題 提 供 者：井上 洋一（愛媛大学）

相原 健二（SOUND GARDEN inc.）

平松 江梨（Tutteo Ltd.）

ファシリテーター：赤津 裕子（竹早教員保育士養成所）

<進 行>

1. 開会（5分）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・赤津 裕子
2. 話題提供者スピーチ（各20分）&意見交換（各10分）

音楽科におけるGIGAスクール構想	井上 洋一
音楽の多様化による地方発信型ミュージックスクールの可能性	相原 健二
Flat for Educationを用いた一人一台端末環境での音楽教育	平松 江梨
3. まとめ&意見交換（25分）・・・・・・・・・・・・・・・・赤津 裕子

話題提供者ご紹介

井上 洋一（愛媛大学）

愛媛大学教育学部・教育学研究科（教職大学院）教授、愛媛大学教育附属幼稚園園長

愛媛大学教育学部特音課程卒業、兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程修了。中学校教諭として電子楽器の活用や創作指導に重点をおいた実践研究を行った後、現在は、愛媛大学教育学部および教育学部研究科において「音楽理論・作曲法」「音楽デザイン」「音楽科教育法」等の科目を担当。

ICTを活用した音楽教育についての研究の他、指揮、作曲活動も行っている。2017年に愛媛県で開催された第72回国民体育大会では、開閉会式の入場行進曲、炬火関連曲の作曲を担当した。

相原 健二（SOUND GARDEN inc.）

（株）SOUND GARDEN 代表取締役 社長、愛媛作曲協議会理事 学校法人 尚美学園 四国同窓会会長
DTM講師・レコーディング・マスタリングエンジニア・CM制作プロデューサー・舞台制作監督・映像監督

恩師としてプロデューサー大海氏、サントリー坂本氏。B'zなどのベース演奏を手がけている、寺沢功一氏などに師事。ヤマハに入社後、29歳で音楽会社SOUND GARDENを設立。音楽制作部、音楽教室部を作る。近年は、小学館様主催イベントや大相撲松山場所の舞台監督などを務める。中四国の企業にCMや会社PR映像などの企画を楽曲と共に提供し監督活動を行っている。2021年には、新しいコンセプトの音楽教室の拠点として道後スタジオ「Oto-Niwa」を建設。

平松 江梨（Tutteo Ltd.）

Flat、Flat for Educationを提供する、Tutteo Ltd. のCountry Manager Japan。

Université Catholique de l'OuestでMBA International Business修了。

Flat、Flat for Educationの日本での本格的なサービス提供開始に合わせて、2020年10月より現職にてマーケティングやサポート業務に従事。

コロナ禍におけるリモート合唱の実践報告

小林恭子（目白大学）

1. 背景と目的

2020 年春に突然世界を襲った感染症のために、音楽活動や音楽学習は中断され、従来と違う対応が急遽求められた。特に歌唱活動は、飛沫感染が恐れられ、斉唱や合唱等多人数での活動は感染及びクラスター発生を危惧して中止を余儀なくされた。2021 年 8 月現在も、合唱をはじめ多くの音楽イベントが中止になっている。

一般社団法人全日本合唱連盟は 2020 年 6 月に「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」を策定し、現在まで都度更新・策定を行っている。そこには「合唱活動を始めとする文化芸術活動を停止するのではなく、いかに継続させ、発展していくかという観点で整理した」とあり、未曾有の危機にあっても「学びを止めない」（文部科学省、2020）同様、「合唱活動を止めない」という考え方が見える。しかし推奨されている合唱活動は、マスク着用、前後方向及び左右方向ともにできるだけ 2m（最低 1m）空け、練習時間の短縮や換気について言及しており、従来どおり合唱活動ができる日々は遠い。

そのような中、2020 年春からインターネットの動画投稿サイトを賑わせたものが「リモート合唱」である。リモート合唱動画は、各自が自宅等で歌った様子を動画で撮影し（あるいは音声と動画を別に記録し）、それらを編集して 1 つの合唱動画にするものである。2020 年度中はプロ・アマチュア問わずこの取り組みが見られたが、2021 年 8 月現在は、既にブームが下火になっている。またこのリモート合唱動画は、当然歌唱力や表現力も重要だが、その質は演出のアイデアと音声・動画編集者等の腕によるところが大きい。

筆者は、このリモート合唱の方法を大学における授業やゼミ活動に取り入れた。動画の完成を目標にした授業もあったが、ゼミ活動では動画は撮らず、合唱活動の「過程」を重要視した。本発表は、ゼミで行ったリモートによる合唱への取り組みについて、方法と結果を報告し、現状と課題について考察する。

2. 対象と方法

リモート合唱を用いた歌唱活動実践の対象は、目白大学児童教育学科の音楽ゼミ所属の学生たちである。小学校教員を目指して勉強中の現 3 年生が 7 名、現 4 年生が 9 名の計 16 名である。音楽ゼミを希望した学生たちのため、音楽経験者は他のゼミに比べると多い。ピアノ等経験者は 9 名（内合唱経験者 1 名、吹奏楽等経験者 4 名）である。吹奏楽等経験者（部活等）は 16 名中 7 名であり、合唱経験者（部活等）は 16 名中 2 名と少

ない。つまり、発声から音取り、合わせ、仕上げという流れをわかっている学生は合唱経験者の 2 名だけである。また、音楽経験は義務教育中の授業・行事のみだった学生は、3 名である。

時期は、現 4 年生に対して 2020 年春学期・秋学期通して、リモートで合唱に複数曲取り組んだ。また、現 3 年生に対しては 2021 年春学期に同方法を用いて 1 曲のみ取り組んだ。

次に、「過程」を重視したリモート合唱の学習の方法である。準備として、伴奏・範唱音声の作成が必須である。パートごとの旋律入り音声を作ったり、伴奏のみの音声にしたり、パート別に歌入りの音声を作成したり、楽譜出版社が YouTube に公開したパート毎の音声動画を用いるなど、合唱曲のアレンジやレベル、学生の能力に応じて、さまざまな方法を用いた。

学生たちは、伴奏・範唱音声に合わせて各自が自宅等で練習し、その歌声をスマートフォン等のレコーダーに録音する。その録音した音声データを Google Classroom や LINE 等を通して提出させた。そして筆者がそれらを伴奏音声とともに GarageBand でミックスして合唱音声を作成した。

そして、その合唱音声をオンライン授業内で公開して聴き合い、各自反省点・改善点等意見を出し合う。次回自分自身がどのようなことに留意して録音するかを発表し、1 週間後を期限に再度提出させ納得がいくまで繰り返す。毎授業で客観的に自分たちの歌声を聴きながら、よりよい演奏を目指していく。

3. 結果

練習の過程や、学生らにアンケートを行った結果について、音声データ等を用いながら発表した。

4. 考察

リモート合唱の方法を用いた「過程」重視の合唱活動の実践は、オンラインにおける練習方法としては効果的なものであった。特に、音声を聴きながら自分の音を外さずに録音する、という音取りと、楽曲の構造や歌詞の意味を考えながら表現を考える等楽曲の把握、という 2 点で極めて有効であった。しかし、その上で互いのパートを聴きながら全員で合わせて歌ったり、発声含め声質を揃えたりすることなどは、オンライン上では指導は難しい。音楽表現の工夫にも限界を感じる。したがって、この方法は、合唱曲を仕上げるための練習の一工程としては有効であるといえよう。

I C T を活用した体験型音楽鑑賞

井上 洋一・平井 智香（愛媛大学）

1 体験型音楽鑑賞

「鑑賞」とは「鑑」=よく調べて吟味する、「賞」=貴重なものを賜る、という漢字そのものの意味が示す通り、「芸術作品などをよく吟味して深く味わう」ことである。従来の音楽鑑賞では、作品を聴くという「行為」よりも、作品の価値を「理解」することに重点が置かれていた。

これに対し、音楽学者の久保田慶一氏は、著書「新しい音楽鑑賞 知識から体験へ」の中で、「音楽を聴く」という「行為」に注目する鑑賞法として、体験型音楽鑑賞を提唱している。体験型音楽鑑賞とは、「聴く」という行為の主体は子どもであり、与えられた「知識」よりも子どもの「体験」を重視する方法である。

2 TAとしての教師の役割

体験型音楽鑑賞では、TA (Teaching Artist) の手法を活用する。Teaching Artist とは「芸術を教えるだけでなく、芸術を通して人を教育することを職業とする人」のことであり、美術館における学芸員がそれにあたる。学芸員は、作品展示によって、来館者（つまり私）と美術作品との「出会い」や「対話」をプロデュースする TA である。

これからの音楽鑑賞は、作品との対話を通して、「私」自身、「私の世界」、「私の経験」へと、まなざしを向ける。TA としての音楽科教師は、この作品との対話のために、「私」と「作品」との個人的に大切なつながりをつくる手助けをする役割を担う。

3 TAの活動の目的と内容

音楽の聴き方は人それぞれである。TA の活動の目的は、「私」（聴く人=子ども）に楽曲（音楽作品）との「個人的な大切なつながり」を発見させることである。教師は、楽曲からその発見の入口となる「エントリーポイント」を見つけ、子どもたちを、音楽の世界にいざなう。そして、この「エントリーポイント」で楽曲に興味・関心をもった子どもたちが、さらに楽曲の価値を見出せるように、様々な体験「アクティビティ」を企画し実施する。

4 体験型音楽鑑賞の効果

体験型音楽鑑賞によって得られる効果として、次のようなものが挙げられる。

- 「エントリーポイント」から紹介された音楽的要素を発見する「喜び」
- 「アクティビティ」に参加することで得られる

「共感」

○楽曲の構造や構成を「価値」として理解する「知的満足」

○過去の経験や自分の心情を、音楽を通して追体験する「感情の惹起」

体験型音楽鑑賞は、音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点（いわゆるアクティブ・ラーニング）の具体的な在り方を示す学習方法と言える。

5 I C T を活用した授業プラン

「エントリーポイント」や「アクティビティ」に I C T を活用した体験を取り入れた授業プランを考案した。

(1) 題材・対象学年

現代音楽を聴こう（中学2・3年）

(2) ねらい

現代音楽で使用される12音技法を体験し、幅広いジャンルの音楽に親しむ。

(3) 概要

【エントリーポイント】

12音の音列を決めて、無調の音楽を作曲することでシェーンベルクの作曲プロセスを追体験する。

【アクティビティ】

①12音の音列を決める。

②12音の音列をオンラインアプリ「ソングメーカー（クロームミュージックラボ）」に入力する。入力するマスの位置を移動させてリズムを工夫する。

③音列を逆行させたり、拡大・縮小させたりして組み合わせる。

④完成した曲を発表し合う。

⑤シェーンベルクの『5つのピアノ曲』の第5曲「ワルツ」や12音によるゲーム音楽を聴く。

6 ソングメーカーを用いるメリット

○音符を使用しないので、楽譜が読めない生徒や、創作に苦手意識を持つ生徒も作曲がしやすい。

○画面をタッチすると音が出るので、音の響きを感じ取りながら創作活動を行うことができる。

○音の高低差や配置が楽譜よりも捉えやすい。

○端末のOSを問わないオンラインアプリなので、自宅のパソコンやスマホでも復習できる。

タテ線譜・ユリディス^{注-1}の今後の方向性-I —”タテ線譜・ユリディスとは何か“シリーズのまとめと今後—

和智 正忠

はじめに

”タテ線譜・ユリディスとは何か“シリーズの第一回目と第二回目では、「タテ線譜メソッド」の導入から実践事例について情報交換を行った。第三回目では、「タテ線譜メソッド」普及のための「教材と指導」、タテ線譜変換ソフトの開発、そして利用者の演奏モチベーションを刺激する自動伴奏アプリ「ユリディス」の活用について議論した。第四回目ではタテ線譜とユリディスの各分野における進展状況について共有し、実際の利用現場における有効性や課題について検討した。このシリーズの最終回では各分野の進展に加え、両者を融合させた効果について検討した。以上を踏まえ、今回は今までの取り組みをまとめた上で、新たなシリーズを設定し、そのIとして今後の方向性を検討したい。

企画・推進：和智 正忠（医学・音楽研究者）

アドバイザー：嵯峨山 茂樹（東京大学名誉教授）、阿方 俊（平成音楽大学、アペカ）

ファシリテータ：齋藤 康之（木更津工業高等専門学校）

書 記：齋藤 康之

1. 開会あいさつとラウンドテーブル進行について（5分）・・・・・・・・・齋藤 康之
2. 参加者自己紹介（氏名、所属など15分）・・・・・・・・・参加者
3. 報告（60分）.....（発表10分＋質疑応答5分）×4
 - ・3月27日オンライン発表の海外での反応と今後・・・・・・・・・阿方 俊
 - ・「いきいき百歳ピアノ」プロジェクト-IとIIの位置づけ・・・・・・石井 良弥、篠塚 早苗
 - ・厚木市「すみれ会」月例会におけるユリディスの活用・・・・・・・・・坂井 康二
 - ・Eurydice のこれまでと、今後の展開について・・・・・・・・・齋藤 康之
4. 話題提供と討議（25分）
 - ・話題提供（今回は会場にて参加者から申し出があれば適宜実施します）
 - ・前シリーズの活動状況、それらを通して得られた成果、および残された課題の纏め
 - ・今後の方向性について討議企画者より一つの提案：
当部会での研究目的を例えば「すべての人々に演奏の喜びを！」と明確化したら如何か？

提案の根拠；
 - ☆今までは、方法論を中心に検討してきたのではないだろうか？
 - ☆今後の更なる展開を図るためには何故それをやるのかを明確化すべきなのでは？
 - ☆今までの取り組み事例から、タテ線譜メソッドは演奏のハードルを下げ、ユリディスは演奏モチベーションを、また立体音響化処理は演奏時の美的感覚を刺激する等効果があると期待される。
 - ☆結局、演奏者は自ら音楽演奏ができることを発見し、そのことで自分だけでなく周りの仲間とも喜びを分かち合っている事例が数多く示された。
5. まとめ（含、今後の方向性15分）・・・・・・・・・齋藤 康之
アドバイザー、参加者

＜ラウンドテーブル参加者＞

報告者：

- ・阿方 俊（平成音楽大学、アペカ）
タテ線譜メソッド創案者。タテ線譜による鍵盤楽器入門書“Self Tutor”（Hal Leonard）を執筆。
2010 年より昭和音大の上記コースを 8 年間担当。中国、韓国などでタテ線譜説明会を実践。
現在はセンチュリーハウス武蔵浦和において 90 歳代の高齢者を対象として「健康寿命延長のための音楽老年学」プロジェクトを行っている。
その活動の様子が 3 月 27 日本学会オンライン研究会で発表され、ドイツ、U.S.A. そしてシンガポールの研究者らから反響を呼んでいる。
- ・石井 良弥（センチュリーハウス武蔵浦和 支配人；プロジェクト窓口）
阿方 俊よりタテ線譜メソッドによるサービス提案を受け、その効果を評価して施設内プロジェクトとして採用した。現在、プロジェクトⅡ実践中。
- ・篠塚 早苗（センチュリーハウス武蔵浦和 看護師；指導アシスタント）
阿方 俊の指導のもとプロジェクトに関わりながら、そのノウハウについて習得中。
- ・坂井 康二（厚木市民活動ネットワーク）
昭和音大の上記コースでピアノに接するようになる。高齢者施設でコンピューターを活用した歌唱活動は 500 回を超す。ユリディスのシニアを対象とした多様な活用を通じて五十嵐 優と共に演奏装置を開発し、それを利用した活動に取り組んでいる。
- ・齋藤 康之（木更津工業高等専門学校 情報工学科 准教授）
嵯峨山 茂樹（東京大学名誉教授）らと共に自動伴奏アプリ「ユリディス」を開発している。現場のニーズに応じたユリディスのバージョンアップ、Standard MIDI File からのタテ線譜への変換、タテ線譜とユリディスを組み合わせたピアノ初心者向け練習システムなどを手掛けて国内・国外で研究発表する傍ら、所属校オープンキャンパスや近隣の高齢者施設においてユリディスを用いる活動を行った。クラリネット演奏を趣味とする。

企画・推進：

- ・和智 正忠（医学・音楽研究者）
娯楽的な音楽活動が勤労者、学生あるいは慢性疾患患者に及ぼす心理的及び生理的効果について実証的研究を行った。現在、特養老人ホームにおいてグループドラミングを実践中。

アドバイザー：

- ・阿方 俊（平成音楽大学、アペカ）

ファシリテータ、書記：

- ・齋藤 康之（木更津工業高等専門学校）

注 - 1 嵯峨山 茂樹（東京大学名誉教授）、齋藤 康之らによって開発されているユーザーフレンドリーな自動伴奏システム

キーボードと音楽療法の現場での一場面, QOL について

橘川 琢（作曲家、文部科学省音楽療法専門士、雑誌 季刊「音楽の世界」編集長）

発表概要・発表者について

発表者はこれまで現代クラシック音楽・現代邦楽・現代雅楽作曲家として活動を続ける中で、10代から20代の作曲初期の頃はMIDIを使用して電子楽器や電子音で音楽作品を制作、30歳を前に音楽を通じて直接人に奉仕する道を選ぶため音楽療法を学び、これまで音楽療法の現場（高齢者施設／デイケア、特養（特別養護老人ホーム・介護老人福祉施設）、成人施設／授産施設、子どもの養護施設／ダウン症候群・自閉症・アスペルガー症候群・レット症候群）で音楽療法士のアシスタントとして入ってきた経験を有する。また自身の大病後、音楽療法の現場を離れてからは、作曲家として文化庁の中小高校の学校公演、区教育委員会公演事業など、国内外で作曲作品を発表。音楽雑誌の編集長として「自動伴奏システム Eurydice（ユリディス）」の研究会への参加を通じて現在の電子キーボードの可能性にも触れられる機会を頂いた。

電子キーボード。演奏会等で魅せられるそのすばらしい機能や音色に感動しつつも、ひとたび演奏会場の場を離れ、クライエント（対象者）の意思表示としての音楽の場、例えば音

楽療法での使用においては、その楽器に対してまた違う光が当てられることがある。さらに状況に応じて、電子キーボードの特性を生かしながらも、多くの「工夫」がなされている事もある。これまで発表者には、様々なセッションを通じて電子キーボードの場の可能性の拡大や多彩な魅力を感じる場面があり、ここで特に印象に残る場面を紹介することにより別の分野や場面に於いて電子キーボードの活躍の場がさらに広がるきっかけとなればと思い、今回発表の機会を頂いた。それぞれの現場で、もし何かお役に立つ点があれば幸いです。

また、音楽表現の先に考えられる QOL（Quality of life／人生・生活の内容の質）を考え、そのためにできることは何かと逆算して考えることも、我々自身の表現の再確認、そして開発設計思想や技術の良き発展につながるのではないかと考えられるため、最後に触れたいと思う。

（きつかわ・みがく）

発表内容

1. 音楽療法とは

- (1) 音楽療法の定義
- (2) 発表者が音楽療法を学んだ理由
- (3) 自己表現・意思表示、音楽で出来ることを模索

2. 電子キーボードの特性を見つめて

- (1) 重量、持ち運び、鍵盤の向きについて、設置の簡易性
 - ア. 音楽の場に來られないクライエント
 - (例) ベッドに横たわりながらの場合
 - イ. 特定の動作とクライエント
 - (例) 動作可能な方向へ鍵盤の向きを調整
指のコントロール
常動運動に対する鍵盤の位置
- (2) 鍵盤の反応、打鍵軽重変化の利点
 - (例) 現在の筋力に合わせて
鍵盤打鍵の力、残存能力を生かす
(特別例) ボタンスイッチ
- (3) 音色
 - ア. 同一動作下における、多彩な音の発音
 - (例) 同音連打に対する、音色による変化
 - イ. 音質を生かす
 - (例) (ア) 楽音と雑音
(イ) 音色によるクラスターの活用

- (ウ) 代用楽器ではなく、電子音を生かす
 - (例) 環境音楽の現場に於ける、電子楽器の音への好感触／作曲家・助川敏弥氏：生楽器の音ではないからこそその良点・響き

(4) 演奏補助能力

- セラピストとピアニスト
 - ・セッションの場での人数、ピアニストについて

3. 音楽と QOL (Quality of life) を考える

- (1) 自己表現、そして意思表示として
 - ア. 受容、反応、フィードバック
 - イ. ノンバーバル・コミュニケーション（非言語コミュニケーション）としての音楽、対話と意思表示
- (2) 音楽の行為や動作が生み出すもの
 - ア. 身体のコントロール、力の加減、
 - (例) 音の強弱と微細運動・粗大運動
 - イ. 反復動作の苦痛軽減、時間単位の提示・予想
 - ウ. 成長することと、残存能力の維持
 - エ. 場や時間の意識
 - オ. 保護者・ご家族の希望されること、音楽のその先を
- (3) 電子キーボードへの希望
 - ア. 電子キーボードならではの魅力
 - イ. 必要から生じる楽器の進化